

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 林 茶英

本論文は、ハングルと同時期に作られた「東国正韻」という新しい漢字音の体系について考察したものである。もともと韓国語には唐末頃の漢語中古音を反映する伝統的な漢字音（伝承漢字音）が使われていたが、15世紀にハングルという新しい文字体系を創制する際に、従来の伝承漢字音には誤った部分が多いとして、これを修正して新しい漢字音の体系を作り、広めようとしたものである。先行研究においては、東国正韻の全体的な枠組みや、「初声」（音節初頭子音）、「終声」（音節末子音）、声調がどのように修正されたかについてはほぼ明らかにされていたが、音節の中核をなす「中声」（母音、ほぼ漢語の韻母から韻尾と声調を除いたものに該当）がどのように修正されたかについては詳細な研究は行われてこなかった。

本論文はこの問題に対して、1448年に刊行された韻書『東国正韻』に基づいて、そこに記載されたすべての漢字について、漢語中古音および伝承漢字音と比較しながら、帰納的に修正の実態を明らかにしたものである。

第1章では、研究目的、先行研究、研究方法などが扱われ、第2章では韻書『東国正韻』編纂の目的と動機、そして同時期に編纂され当時の実際の中国語の発音を示す『洪武正韻訳訓』との関係が扱われている。第3章では、『東国正韻』の序文の解釈と、初声、終声の修正が扱われている。第4章「中声修正の実際」が本論文の大部分を占める中声の修正を扱った章である。ここでは、すべての東国正韻漢字音を、東国正韻の韻部の整理のされ方に従って終声の別によって分類した上で、漢語中古音と伝承漢字音との比較を通して、どのように修正されたかが詳細に論じられている。そして、その結果として、①音節制約、②韻部の区別、③開合の区別、④洪細の区別という4つの修正パターンが抽出されている。これらのうち、一部分は先行研究で断片的に言及されることもあったが、東国正韻全体を通して、このような修正パターンを抽出したのは本論文が初めてであり、大きな業績として評価することができる。これらのうち、漢語中古音における「摂」と東国正韻の韻部との対応関係を当時の人々が重視していたことを示す韻部の区別や、中古音における「等」の概念そのものではないが、それを反映する洪細の区別を当時の人々が重視していたと考えられることについては、従来の東国正韻研究には見られなかった重要なものである。また、先行研究においてしばしば『古今韻会舉要』に見られる字母韻との関係が取りざたされてきたが、本論文においては部分的にその影響は認めつつも、全体としてはその影響は限定的なものに過ぎず、それよりも伝承漢字音がより重視されていたことを明らかにしているのも優れた点である。

本論文については、若干説明が十分ではない改善すべき点も見られるが、何よりも東国正韻の中声全体にわたってそれがどのように修正されたかを明らかにしたことは大きな功績と考えられる。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しいものと判断する。